

Title	サルデーニャの村落とocru malu : ひとつの人類学的解釈
Author(s)	井本, 恭子
Citation	大阪外国語大学論集. 21 p.155-p.174
Issue Date	1999-09-30
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/79806">https://hdl.handle.net/11094/79806</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## サルデーニャの村落と *ocru malu*

—ひとつの人類学的解釈—

井 本 恭 子

### “*Ocru malu*” nei villaggi comunitari della Sardegna

— Una considerazione antropologica —

Yasuko IMOTO

Scopo di questo articolo è di tentare un' interpretazione dell' “*ocru malu*” (espressione sarda) in un' ottica antropologica. L'interpretazione di ciò solamente come sopravvivenze o espressioni di un oscuro ed irrazionale culto della tradizione locale è da ritenersi un errore, per cui si è concentrata l' attenzione su come si evince il concetto di “*ocru malu*” dal contesto socio-culturale dei villaggi comunitari.

Per illustrare l'idea di “*ocru malu*” l'articolo si apre chiarendo il significato del termine, che molti studiosi considerano spesso equivalente a *malocchio* e *jettatura*. Nel secondo capitolo si prende invece in considerazione l' “*ocru malu*” come strumento di controllo sociale ed invidia istituzionalizzata. Infine, l'ultimo capitolo è dedicato alle operazioni magiche per curare le vittime di “*ocru malu*” e alla funzione di tali riti.

私は魔法も邪視も信じないけれども、その俗信およびそれに基づく多くの習俗を研究すれば多くのことが知れる。(TYLOR: 1962)

いかなる文化にあっても、人はひとつのコスモスの中で認識を方向づけるものを備えている。そこにはカオスよりも「秩序」と「合理性」がある。その内には基本的な前提と原則がある。たとえそれが人みずからによって意識的に構築されたり関連づけられたりするものではないとしても。(HALLOWELL: 1960)

#### はじめに

邪視<sup>(1)</sup>とは、一般に目から不思議な力が射出され、視線の対象となるものに害を及ぼすことだとされる。その視線が故意に向けられたものであってもなくても、見られたものすべてに災厄がふりかかるという。このような俗信はイタリア固有のものではなく世界中に広く見出され、とりわけ中近東、地中海地方、南アジアなどに顕著である。

ELWORTHY の THE EVIL EYE (1895) は、世界各地に見られる邪視を集めたもので、さまざまな土地を歩いて蒐集したお守りや護符、邪視にまつわる俗信、エジプトやヨーロッパなどの古代文明を中心とした宗教現象との関連、と包括的な邪視の記述が主体である。その後人類学者も邪視に関心を寄せ始め、1972年全米人類学会で開催されたシンポジウムでその高まりは頂点に達する。その成果は4年後 MALONEY によって THE EVIL EYE としてまとめられている。これは15の論文から成り、アプローチの方法もさまざまである。こうした邪視研究の流れは、清水芳見氏が「邪視研究の動向」(民族学研究:1983)として報告している。

サルデーニャの邪視に関する資料は、記述中心のものと社会的機能を重視した分析中心のものがある。前者は19世紀末から20世紀初頭に集められた迷信や俗信、民間治療の記述で、習俗の中で邪視が断片的に取り上げられている。<sup>(2)</sup> それに対して後者は1970年代から80年代に行われた調査の結果であり、単なる邪視の記述にとどまることなくその役割や機能を明らかにしようとしている。<sup>(3)</sup>

本稿の目的は、邪視の起源を求めることでも、呪術信仰の枠の中で解釈することでもない。ある社会、文化のなかで起きる事象のひとつとして邪視を取り上げ、そのメカニズムを明らかにしながら、賦与された意味をすくいとることにある。邪視信仰とは何かという問題ではなく、サルデーニャの社会文化の枠の中で邪視がもつ意味を考えてみたい。邪視によって大なり小なり禍が起きると信じられ、辟邪の方法として護符や魔除けなどを用いるという形態のみを問題にするのではなく、所与の社会あるいは集団で、如何なる論理性をもって邪視が機能しているのかを述べようと思う。別言すれば、邪視についてではなく邪視をとおしてサルデーニャ社会文化の「ひとつ」の解釈を試みることに大いに興味がある。もちろん、邪視がサルデーニャ全土に見られるわけではなく、主に村落共同体的な地域に限られることを思えば、その「解釈」をもってサルデーニャ社会文化の全体像とすることはできない。<sup>(4)</sup> しかし、ひとつの指標にはなるであろう。

似て非なるもの    マ   ロ   ッ   キ   オ    イ   エ   ッ   タ   ト   ウ   ー   ラ    イ   エ   ッ   タ   ト   ー   レ  
 -malocchio,    jettatura,    jettatore-

イタリア語で邪視に相当する言葉は malocchio、ナポリなど南イタリアでは jettatura とされるが、サルデーニャでは何と呼ばれ、どのように認識されているのだろうか。まず手始めに「邪視」に相当する言葉を集めて整理してみた。<sup>(5)</sup>

- ocru malu, orcu malu (ヌーオロ地方)
- ogru malu, oggiu malu, oyu malu (ログドーロ地方)
- ogu malu (カンピダーノ地方)
- colpu de ocui, corpu de ocui (カンピダーノ地方)
- colpu di l'occi (ガッルーラ地方)
- ogu liau (サラップス地方)
- pigamentu 'e ogu (トレクセンタ地方)
- oju isciau (サッサリ地方)

jettatore に相当する名詞  
pindacciu (全島)  
piddinu (バルバージャ地方)  
oghiadore (全島)  
colpadore de oju (ログドロー地方)  
corvu (ヌーオロ地方)

157

*una femmina chi' ettas' ocru malu* (邪悪な視線を投げる女) のように婉曲的な言い方をする。(CANNAS: 1994) 筆者が邪眼の持ち主はどんなふうか尋ねた村人も、ちょっと考えてから「すぐにはわからんさ。目印みたいなもんはない... 村のもんならみんな知つとるがの...」と答えるばかりであった。このように遠回しにしか言わなかったり、視覚的にも差別化できなかったりするのには、「邪眼の持ち主」がある特徴を持った人物として認識されていないからではないか。裏返せば、誰もが「邪眼の持ち主」になりうると考えられていることになる。ナポリで *jettatore* が具体像をもって時にはおおげさに語られるのとはえらく違う。例えば、A. DUMAS は *jettatore* をこう描いている。<sup>(6)</sup>

*jettatore* は痩せて青ざめた顔をしているものだ。鉤鼻にどこかしらヒキガエルを思わせる大きな目、それを隠すために眼鏡をかけている。ヒキガエルは周知のように天から *jettatura* という魅惑の力を授かった。一瞥するだけでナイチンゲールを殺してしまう。だから、ナポリの道で私が述べたような男に会ったら、注意せよ！ *jettatore* にまず間違いはない。(DUMAS: 1889,164)

では、なぜサルデーニャでは *jettatore* がそれほど強く意識されないのだろうか。「邪視信仰」の名のもとにひとくりにされている *jettatore*, *jettatura*, *malocchio* という言葉に賦与された意味が異なるからだろうか。異なるとすればどのような弁別基準があるのだろうか。もう少しこれらの言葉の解釈にこだわってみよう。

DE MARTINO によれば、ナポリでは *jettatore* は主に男性、しかもインテリや官僚や文士、医者、弁護士、裁判官などの専門職にある者で、その「目」は人を惑わす力をもっている。(DE MARTINO: 1989) LA SORSA はプーリア地方で他人に害をおよぼす不思議な力をもった人間が *jettatore* と呼ばれ、横目で見たりひとことつぶやいたり子どもの頭を撫でたりするだけで災厄を招く、と言う。(LA SORSA: 1915) サルデーニャで *jettatore* に相当する言葉は *oghiadore* であるが、ナポリのように邪視の話の主人公となるほど一般的ではない。COSSU によれば、*oghiadore* は射抜くような冷たい目や澀んだ目をしており、意図的ではなくとも視線によって災厄を招く。(N. COSSU: 1996,63)

以上のことから *jettatore* の属性として、1) 生まれつき神秘的な力をもっていること 2) 身体的特徴があること 3) 男性であること 4) 知識、技術をもっていること、が上げられる。ただし、1) については邪術の類<sup>(7)</sup>とは異なり、無意識のうちに「目」に表れて結果としてマイナス方向に働く力でなければならない。このような特徴をもった人物がサルデーニャでは視覚的にも意識的にも *oghiadore* として差別化され、その力を軸とした *malocchio* の話がほとんどないのである。<sup>(8)</sup>

では、*jettatura* はどうか。*malocchio* のことを南イタリアとくにナポリで *jettatura* と呼ぶ、と同意味にとられているが、それは違う。視線を投げかけることで災厄をもたらすという結果を見れば同じかもしれないが、*jettatura* は *jettatore* のもつ不思議な力の行使や災厄の原因がそうした力と結びつけられることを意味する。例えば、劇場でオペラを観ているとしよう。

ある人物がなにげなくシャンデリアを見ると、突然シャンデリアが落ちてきた。その時《jettatura!》と叫ぶ者がいる。それは「ある人物＝jettore」が視線を向けたことやシャンデリアが落ちた原因を言う。

それに対して malocchio は jettatore の行為やその結果とは無関係である。不可思議な力の備わっているある特定の人物が中心の話の中で malocchio という言葉は出てこない。筆者がB村で malocchio の聞き取りをした際、誰がどのようなめに遭ったかは詳しく語ってくれるのだが、肝心の視線を放った人物のことは不思議とあまり強調されなかった。「そこにそういう者がいたから」といったような曖昧なものばかりで首をかしげたものだ。その時はこちらも malocchio と jettatura は同じような意味、jettatore は「邪眼の持ち主」か malocchio, jettatura の行為者と思い込んでいたので、村人たちの話がよくわからなかった。しかし、これらの言葉をそれが用いられた文脈のなかに戻してみると、その意味が全く違うことに気づいた。jettatore, jettatura の話では、ある人物が妖術を生来もっているものとしてすでに差別化されてさまざまな災厄と関連づけられる。一方、malocchio は災厄を招く「ものすごい力」そのものよりも、ある「もの」が突然異常な状態になった場合に限ってその原因説明として持ちだされている。筆者が聞いた話を例にしておこう。

うちの坊やが真っ赤な顔をして泣きじゃくっていた時のこと。ある女が訪ねて来たんで坊やをあやしながら世間話をしばらくしてたんだ。すると突然ピタリと泣き声が止まったんだよ。見ると、ぐったりしてまるで生気がないじゃないか。もうびっくりして、こっちはおそろするばかり。ひょっとして... と思って Ztia の所に坊やを連れて走ったんだ。祈禱のおかげで元気になったけど、あん時はもうダメかと思ったよ。（B村筆者聞き取り／1997）

この話は jettatore の烙印を押された人物の恐ろしい力ではなく、突然ぐったりした赤ん坊が中心に展開する。つまり、邪視の行為者ではなく、その対象が問題にされるのである。視線によって「望ましくないこと」が引き起こされた場合すべてが malocchio ではなく、特定の対象に異変が起きることのみを意味しているのではないだろうか。事実、報告のほとんどが〈突然異常な状態になる → malocchio が原因と判断される → 治療 → 回復〉という展開パターンになっている。jettatore がまず確認されて「こと」が起き、その不可思議な力を軸として展開するのではない。

ということは、malocchio は生まれつき超人的な力をもった特別な人物の「目」ではないことになる。別言すれば、ある「もの」を見れば誰でも「邪悪なもの」とらわれ、その「目」が対象を害する力をもってしまうと思われている。話に jettatore が出てこないのも当然、malocchio とは特定の人物の不可思議な力を秘めた「目」ではなく、誰もがもっている「目」とその視線の対象に関係するのだから。

これまでの邪視に関する記述では、malocchio, jettatura, jettatore が同じ性質のものとして扱われているが、それらが用いられている文脈に注意すれば、それぞれに賦与された意味の

違いが明らかになる。サルデーニャの場合、malocchio と jettatura, jettatore の実体は同じではない。誤解を恐れずに言えば、jettatura も jettatore も存在しない。超人的な力を生まれながらもっている人物の視線は malocchio とは別の意味があると言ってもよい。

今まで述べてきたことを整理すると、malocchio という言葉が使われるのは「目から射出されたある力がもたらした災厄」すべてにではなく、ある限られた対象が突然異常な状態になった場合のみである。そしてその対象に向けられる「目」は、神秘的な力を秘めた人物に属するものではなく、誰もがその所有者となりうる。それに対して jettatore, jettatura は「妖しい力」、神のみに可能な超常的事象を起こす力をもって生まれた人間とその力が招く災厄を問題にする。<sup>(9)</sup> さらに、jettatore は身体的特徴や知識技術の有無などによって区別されるから、民衆に属さない人物（聖職者や医者など）や身体の異常が可視化される人物に特定されてしまう。ところが、malocchio はそうした特別な力を備えた者の「視線」やそれがもたらす災厄を意味しない。ある「もの」が異常な状態になった説明としての「邪悪な目」であり、それは誰もがもちうるものである。

したがって、サルデーニャで「邪視」と言えば malocchio だけになる。本稿では、一般に「邪視」の意味で同様に用いられているイタリア語 malocchio, jettatura との混同を避けるため、サルデーニャの土地の言葉 ocru malu（北西部、中部の言い方）を使うことにする。

### ocru malu の正体

邪視は「非科学的」だとしても、ある論理のなかで機能するひとつの要素と考えれば、そこには何らかの思考形式、価値認識の仕方が認められるはずである。それを見極めるには ocru malu を所与の社会の生活様式のなかで捉えていく必要がある。そこで、ここでは、ある「もの」＝ ocru malu の対象を手がかりに「邪悪な目」の正体を明らかにしてみたい。

「邪悪な目」が向けられる「もの」

ocru malu の対象を（表1）から取り出して並べてみる。

- ・子ども
- ・女性（妊婦、豊満な女）
- ・家畜
- ・チーズをつくる人、パンを焼く人、お菓子をつくる人

列挙した対象を見ると、農民や牧夫の生活、とりわけ生産活動に関係するものが多いことに気づく。事実、家族＝生産組織として機能する農業や移牧では、子どもや女性は労働力、家畜は生産手段となる。また、チーズ・パン・お菓子は自家消費の食糧としての価値だけでなく、その技量も重視される。ocru malu の被害は農民や牧夫の家族に直接及ぶものばかりで、裕福な人や成功した人物が登場する例はほとんどない。村で「裕福な人」として区別されるのは、大土地所有者、事業家、医者、弁護士、エンジニア、官僚など、農業家畜飼養に従事

しないわずかな人たちである。生活ぶりが特に派手というわけではないが、これらの人々は signori と呼ばれており、「彼ら = signori」は「我ら = 農業家畜飼養の従事者」とは違うと見なされている。signori が ocru malu の対象から除外されるとすれば、ocru malu は異なる階層間に起きるのではなく、農民や牧夫によって形成される比較的「均質な」層で生起する事象と考えられる。ただし、ここで言う「均質な」とは個々の農民や牧夫の生活が一様に不安定な状態のことで、所有しているものが同じという意味ではない。

前述の対象が突然異常な状態になった時、ocru malu が原因説明にもちだされるわけだが、報告を丹念に読むと、「もの」それ自体が問題にされているというよりも、「恵まれている」ことが「目」を向けられる原因になっていると思われる。例えば、家畜についてこんな話がある。

ogu malu、あったらしいね。あたしはこんな話を知ってるよ。ある婆さんが教えてくれたんだ。いつだったか、あたしの父ちゃんが子牛を一頭連れて通ったんだ。まあ、その牛の見事だったこと。父ちゃんが大きな道に出ると、窓から覗いていた女が、「ちょっとあんた、何て立派な子牛を連れてるんだい」と言ったんだ。その途端に、子牛がへたりこんだのさ。その女は ogu malu を信じてたもんでピーンときたんだね、すぐに聖水をもって飛んで来た。悪気があったわけじゃないから。その水を子牛にかけてやると見る間に元気になったんだよ。今でも誉める時には「ogu malu が禍をもたらさないように」言いながら触るのさ。(下線筆者/CANNAS:1994,81)

先の話から、子牛の頭数は問題ではなく、「見事な」「立派な」と形容されるほど子牛の質がよいことが ocru malu の対象になる原因だと考えられる。「誉められる」ようなものに「恵まれる」ことに「目」が向けられるのである。その他の例を見ても(表1)、誰かに誉められたり何か言われた直後に異変が起きることが多く、それが「恵まれていること」のしるしとなっている。誉めるのは目を引くような「もの」があるからで、誉め言葉は対象が「みんなと同じでない」状況証拠と言える。ocru malu が異常な状態の原因説明にもちだされるのは、このように家畜、子ども、女性、技量に「恵まれる」場合に集中している。裏返せば、「みんなと同じ」であれば ocru malu の対象にはならないことになる。筆者が聞き取りを行なったB村でも、ocru malu が原因説明にもちだされるのは、赤ん坊がかわいらしかったりチーズを作るのが上手だったり「恵まれている」ものが多い。

「邪悪な目」が向けられるのは、このように農民や牧夫の生活にとって大切な「もの」に「恵まれる」場合である。「目」から射出される不思議な力だけを歴史的に追っていたのでは見えてこない、村落のなかでの ocru malu の一面をここでもう一度整理しておきたい。

- ・ ocru malu は異なる階層間では起きない(生産活動に従事する者の間に起きる)
- ・ 誉め言葉は ocru malu の誘因
- ・ 「恵まれるもの」が ocru malu の対象

ocru malu にあるこうした規則性のようなものは、農民や牧夫の価値認識の仕方と連動した社



会的機能の存在を予想させる。それを明らかにするには、「邪悪な目」と「恵まれる」ことに託された意味を考えなければならない。

表 1

ocru malu の主な対象	かけられた言葉の例	ocru malu の結果
・子ども (特に乳児)	・まあ、かわいい ・丈夫そうな子 ・いい子だね	・急にぐったりする ・突然、お乳を飲まなくなる ・突然、目を閉じてしまう ・時には死亡することもあり
・妊婦 ・豊満な女性	・立派なお腹だね ・よくお乳がでて羨ましいよ	・急に、気分が悪くなる ・流産する ・お乳が出なくなる ・時には死亡することもあり
・羊、牛、豚などの家畜	・こりゃ、いいね ・立派なもんだ	・突然へたりこんで動かない ・時には死ぬこともあり
・チーズをつくる人 ・パンを焼く人 ・お菓子をつくる人	・たいしたもんだ ・どんな塩梅だい ・薪を入れ過ぎだよ	・チーズが凝固しない ・うまく焼けない ・膨らまない

## 平準化のメカニズム ー逸脱への制裁ー

「邪悪な目」は「恵まれる」もののみに向けられることはすでに述べたが、農民や牧夫にとって「恵まれる」とは何を意味するのだろうか。みんな一様にわずかな生産手段と労働力をもとに生活している村では、1800年代末から1930年代に見られた富農・豪農の存在はなく、土地や家畜が少数の者に集中する富の偏在が全くない。200ヘクタール以上の土地や250頭以上の家畜を所有している者はひとりもないのである。10～50ヘクタールの土地を所有しているのが普通で、牧夫であればそれに50頭ぐらいの家畜が加わる。このような農民や牧夫の似たりよつたりの経済状態からすれば、「恵まれる」とは、人よりいい家畜を持っている、人よりうまくチーズを作る技量がある、人より丈夫な子どもがいるなど相対的に「並み」以上のイメージをもたれることに他ならない。みんな似たりよつたりの状態を「並み」とすれば、人より「恵まれる」とは「並み」から逸脱することを意味している。

ocru malu は「並み」から逸脱しているものに害＝「制裁」を加え、その一方でメンバーに対して逸脱への警告を与えている。この場合の「制裁」は罰するというよりも、象徴的に「並み」以上のところを取り去ることにある。「並み」以上のものを異常な状態にして「元の状態」に戻す。ocru malu にやられても回復する「治療」が用意されているのはそのためである。

では、なぜ、「並み」以上のものに「制裁」が必要なのか。農民や牧夫が「恵まれる」もの

に抱く羨望という個人的なレベルだけではなく、経済的に似たりよったりの閉じられた集団の根底には利害のメカニズムが働いているに違いない。アメリカの社会人類学者 FOSTER はそれを《cognitive orientation》(以下、認識の方向づけ)と呼ぶ。<sup>(19)</sup> そのひとつのモデルとして《image of Limited Good》(以下、限定された善きモノのイメージ)を設定し、農民の行動や考え方のかなりの部分を解き明かしている。少し長くなるが、FOSTER の説明を以下に紹介しておく。

私にとって農民の行動を説明するのに最適な認識の方向づけのモデルは「限定された善きモノのイメージ」である。「限定された善きモノのイメージ」によって農民の行動の大部分が型づけられていると言ってもよい。それは農民が彼らの社会的、経済的、自然的世界、すなわち彼らの環境全体を、土地、財産、健康、友情、愛情、男らしさ、名誉、尊敬、地位、権力、威光、保証、安全のような人生で望まれているものすべてが限られた量であり、彼らにとって常に不足していると感じていることを示してくれる。そうした望まれるものやその他「好ましいもの」すべてが、量において限られているばかりでなく、加えて、その利用可能な量を増加させようにも農民の力ではどうにもならない。人口過密地域での土地不足という明白な事実を当てはめるようなもの一みんなに行き渡るだけないのだ。土地のような「善きモノ」はもとからあると見なされ、必要ならば分割再分割されることもあるが、増やされることはない。

分析の都合上、私は村落共同体を閉じられた体系と考えて論を進めている。農民は自分の存在を彼の村や隣接する地域の自然や社会的リソースによって決定され限定されるものと感じている、という特殊だがきわめて重要な考え方である。そう考えれば、「限定された善きモノのイメージ」は当然の結果と言える。もし、「善きモノ」が拡大の可能性がないほど限られた量しかなく、その体系が閉じられているとすれば、ある個人またはある家族は他者の犠牲なしでは地位を上昇させられないことになる。したがって、どんな「善きモノ」に関しても誰かの地位が明らかに相対的に上昇すれば、共同体全体の脅威と見なされる。誰かが略奪されている一本人が気づこうが気づくまいが。そして、誰が損をしているのかははっきりしないことが多いーもしかしたら自分かもしれないーので、いかなる上昇もある個人やある家族だけの脅威ではなく、すべての個人や家族にとっての脅威と理解される。

(筆者下線／FOSTER: 1965, 296-297)

このように「閉じられた」村では、「運」を別にすれば「善きモノ」の拡大は必ず他者の犠牲の上に成り立つという認識が作用するため、人々はなるべく平均的な生活を送るように心がける。もし、既存の状態から逸脱すれば、バランスを回復するようなメカニズムが自動的に作動し修正するようになっている。この点に注目すれば、FOSTER の分析概念を *ocru malu* にも適用することができる。

ocru malu は「並み」以上になることに警告を与え、「並み」以上のものを制裁する、平準化のメカニズムである。ここで、「限定された善きモノのイメージ」を想定すれば、「善きモノ」の移動に伴う漠然とした損失感（実際に損害を受けたかどうかは問題ではない）と均衡を破ることへの恐怖が、意識されるにせよ、無意識にせよ、働きかけがあるから、「並み」以上のものに「目」が向けられると考えられる。そこにある決められた量の「善きモノ」はみんなに分配されるもので、分配以外に「善きモノ」の獲得はないという認識が、農民や牧夫を「並み」以上のものに敏感に反応させる。誰かが「恵まれる」ことは、誰かが「損」をして「並み」以下になる。こうした逸脱は既存のバランスを崩すことになるため、個人に脅威を与えながら「並み」を維持するような装置が必要とされる。それが ocru malu ではないだろうか。

### 心理的メカニズム ―「妬みの目」―

「限定された善きモノのイメージ」を設定することによって、ocru malu を平準化のメカニズムと解釈できたが、なぜ、「目」なのか、しかも「邪悪な」という悪い意味をもたされねばならないのか、疑問が残る。アメリカの社会人類学者 WOLF によれば、そもそも経済的なものである統制のメカニズムに平行して「制度化された妬み」のような心理的メカニズムがあり、それはゴシップ、邪視、呪術の恐怖や実行など、さまざまな現象に示される。(WOLF: 1955,46) WOLF の指摘するように、統制のメカニズムと不可分の心理的メカニズムに「妬み」があるとすれば、ocru malu は「妬みの目」ということになる。この「妬み」が所与の社会でどう解釈されているのか、平準化のメカニズムとして ocru malu が選択される謎を解く鍵はそのあたりにある。とは言え、malu (邪悪な)、ocru (目)、invidia (妬み) と連想ゲームのように並べてみても、何も浮かんでこない。こういう時は語源が頼りである。invidia の項目には invidia はラテン語の invidus から来ており動詞 invidere = in + videre (in = upon, videre = to see) と同様に「悪意をもった目で見ると」という意味で用いられることもある、と書いてある。また邪視がもともと他人の所有物への物欲しげな目に属する呪術的な力と関連づけられることから、昔の人は invidia と呼んでいたらしい。ここで、「妬み」から「悪意」= malu へさらに ocru malu へと、「人の物を欲しがると」という共通項を結び目に繋がっていく。もちろん、これは現在の文脈のなかで捉えられた意味ではないが、呪術的な力と invidia が関連づけられるのは興味深い。

イタリアの民俗学者 BRONZINI よれば、「憎悪」「敵意」と同じようにある個人またはある物に対して抱かれる気持ちとしての「妬み」は、malocchio と同意語にならない。(BRONZINI: 1981) つまり、「妬み」の性質は社会的なもの文化的なものによって異なり、malocchio という行為を含んだ「妬み」は、個人対個人の感情レベルのみで理解されるものではない。BRONZINI は農民の「妬み」の性質を次のように説明している。

裕福な者の妬みと貧しい者の「妬みの作用」の直接原因は経済的、社会的なもので

あることに変わりはない。だが、前者と後者ではその原因のなかが全く異なる。signori の妬みは派閥間のあたりまえの、やもうえないゲームのようなものだと感じられる。その背後にあって妬みを煽るのは、利害、利益、権力あるいは支配である。農民の妬みはある集団のメンバーどうしの悪い関係によって生まれる。とりわけ、集団における富の分配の不平等あるいは差別が妬みを増大させる。ゆえに、ある者から別な者へ富が移動し急に裕福になれば必ず、妬みをもたらすのである。こうした妬みは、集団の社会的構造を統制する経済システムのなかで、絶えず湧き出る泉のように、生まれている。したがって、妬みの呪術的作用は経済的な要因に帰することができる。(下線筆者／BRONZINI: 1981, 269)

BRONZINI の言う「裕福な者の妬み」は、物質的所有よりも競争によってかき立てられる。例えば、抜きんでたい、人の上に立ちたい、自分を知らしめたい、などの成功願望が考えられる。このような場合は、お金のように生活に必要なものより、シンボリックなものに価値が置かれる。それに対して「農民の妬み」は、彼ら自身や家族の生活を脅かすような変化、富の分配と移動が原因となる。BRONZINI は後者の「妬み」を呪術的作用、つまり、malocchio がセットされているものとして区別する。この違いのもとを辿って行くと、「限定された善きモノのイメージ」の有無に到着する。前者の「妬み」が呪術的作用を含まないのは、富は無限、拡大の可能性はいくらでもある、という認識による。たとえほんの一握りの者に限られた成功が「妬み」をかきたてるとしても、自分が犠牲になっているとは思わない。また、誰かの成功が社会全体の安定を脅かすような不安材料にもならない。「妬み」は個人的な成功への欲望にすぎないのである。それに対して、「限定されたよきモノのイメージ」が存在するところでは一方が何かを得れば他方が何かを失うというゼロ・サムゲームとなり、全体の均衡(差引ゼロ)を維持するための力、逸脱するものを元に戻す力が必要となる。そこで、他者の富への欲望とされる「妬み」に呪術的な力がセットされるのである。

こうした平準化のメカニズムに「妬み」が持ち出される理由は、1) 富の所有と分配に「妬み」はつきもの、誰もが抱く他者の富への欲望であること 2) 「妬み」は本人の意図とは無関係に対象を害する力を発動させると信じられていること、このふたつにある。例えば、次のような話から「妬み」が害をもたらすとされていることがわかる。

赤ん坊を養育する時には、必ずからだに触らないといけなない。どこでもいいから触りながら言葉をかけるのよ。(B村筆者聞き取り：1997)

ふりかかってくるかもしれない災難には気をつけねば、あたしはそう思うよ。そりゃ無関心な人もいるがね。あたしは通りがかりに子どもたちを見かけると、親戚でなくとも「こんにちは」「こんばんは」って声をかけるんだけど、Deus bor vartet! (神様が見守って下さるように) と言わないと落ち着かないんだ。子どもたちは笑うん

だけど、母親たちは喜んでいてと思うね。(CANNAS: 1994,86-87)

みんなが ocru malu するわけではないけど、図らずもってことがあるから、用心するもの。良識のある人ならそうするね。例えば、パンを作っている家に入ったらすぐにこう言うのよ。Deu lu vardet (神様がお守り下さるように) そうしなきゃ、パンが malocchio されて、うまく焼けないかもしれない。そうなったら大変。(CANNAS: 1994,87)

ocru malu すると思っても、しかるべきことをしない人が悪いんだ。そうでない人も用心するにこしたことはないね。でないと迷惑だし、不注意だって思われるんだ。ほらパンをこしらえているところに来るもんがいるだろう、挨拶してもまじないを言わないからあたしらは怒ってこう言うんだ。「あん畜生、入ってきて Deu bor vardet! (神様が見守って下さるように) とも言わなかったよ。ひとの仕事なんてどうでもいいんだ」。ocru malu かもしれないから、被害にあわないように急いでしかるべき処置をしたよ。(CANNAS: 1994,87)

前述の話はどれも「妬ましい」と思っているわけではないが、自分自身や他人がもたらす「妬み」の結果を恐れるため、それを中和するような行為が求められる。赤ん坊に触れたり、Deu bor vardet と言ったりするのは、相手に害を与えるかもしれない不安の表れであろう。別に悪意はないのに「誉める」ことに注意するのも、「妬み」を警戒するからである。このように、「妬み」が「恵まれている」ものに対して誰もが抱く悪感情だと認識されているからこそ、社会的圧力として効果的なのである。つまり、向けられる対象ははっきりしていても、どこの誰が妬んでいるのか（もしかしたら自分自身であるかもしれない）、その発信源が特定されない「妬み」は個人を警戒や自制に向かわせる力がある。

では、他者の富への欲望がなぜ「目」と結び付けられるのか。村落共同体的な社会ではメンバーどうしは富の所有と分配をめぐる絶えず争っており、疑念や不信が渦巻くなかで生活している。そうした状況では他者の「目」に敏感にならざるをえないし、自分の方も他者に対して無関心ではいられない。つまり、相互に監視するのである。それで「目」は異常を察知するセンサーのようなものとなる。筆者が初めてサルデーニャの村をいくつか歩いて回った時に、あちらからもこちらからも放たれる視線に射抜かれてしまったことがある。それは好奇心に満ちた「目」というよりも、執拗な監視の「目」、払っても払ってもまとわりついてくる蠅のように不快なものであったのを覚えている。これは一個人の単なる印象に過ぎないが、他者の「目」のすごさを示すことぐらいにはなるだろう。

こうした監視の「目」はどこにでもあり、誰もがもっているから、それから逃れることはできない。他者の「目」は網の目のように張り巡らされた赤外線センサーと同じで、避けて通れないようになっている。そこに、平準化のメカニズムの要素として「目」が選択される理由がある。

他者の「目」＝監視の「目」＝異常を察知する「目」という認識があれば、当然、逸脱するものは誰かの「目」に捕らえられると考えるだろう。この場合、「目」は邪悪な感情とされる「妬み」＝他者の富への欲望を持つと解釈されるから、ocru malu と呼ばれるのである。また、ocru malu が「呪術的な力」（対象に害をもたす）を持つとされるのは自然に左右される農業や移動牧畜に頼る者の生活の不安定さ、つまり、限られたリソースと乏しい余剰生産物のため絶えず生存が脅かされている状態からくる不安や恐怖がもとになっている。いつも奪われるような感じがあるから、「妬み」に悪い力をイメージして恐れるのであるこのように、平準化のメカニズムとして邪視が選択される背景には、他者の「目」と他者の富への欲望としての「妬み」を警戒させる社会的かつ心理的なものがある。

### 治療を受けもつ女たち

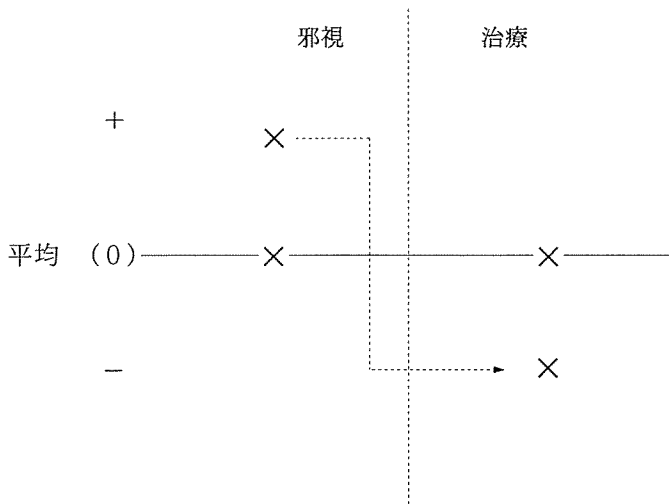
ocru malu は逸脱するものを制裁するが、その程度は軽い。逸脱するものを徹底的に差別、隔離して周縁に追いやるようなことはしない。感染、伝染するような病気とは異なり ocru malu がもたらす害は正常な状態からの一時的逸脱である。事実、突然異常な状態になっても、ocru malu が原因で死に至るケースはほとんどない。死んだり元の状態に戻らなかったりするのは、適切な対症療法を取らずに放っておくことが主な原因である。ここに回復に関して対照的な例がある。

ガヴォーイにチーズ作りの名人と評判の羊飼いがいてよ、そいつに起こったことなんだ。いつものように小屋でチーズを作ってたんだが、妙なことにうまくいかねえんだ。チーズができないんだよ。「まあ、こんな時もあるさ」と、そんな時は気にもかけなかったみたいだがよ、次の日もダメだったんだ。それですっかり落ち込んで... 何でチーズができねのかわからないんじゃ、お手上げさ。ところがだ、不思議なもんだぜ。ある婆さんに診てもらったとたん、うまくいくようになったんだ。チーズが嘔みてえにちゃんとできるんだ、驚いたぜ。（B村筆者聞き取り：1997）

子どもの頃、オルゴーゾロに二十歳ぐらいの背の高いきれいな女がいた。ある日、その女がオリエーナに行った時のこと。オルゴーゾロじゃ、オリエーナの奴らは ocru malu するって言われてたんだ。オリエーナの領内を通る時、羊飼は家畜がどうかなりやしないかと心配したもんだよ。村に入るまでに何か緑色のものを身につけたり、裏返しに服を着たりしてね。それで、その女だけどぴんぴんしてオルゴーゾロを出てオリエーナに入るんだけど、じろじろ見られてこう言われたんだ。「何て背の高い女だ！」オルゴーゾロに戻る頃には具合が悪くなって、寝込んでしまったんだよ。今でも ocru malu を信じる者と信じない者がいるからね。当時もそんなで、orassione（祈禱）を受けさせなかったんだ。でも良くならないから受けさせたんだけど、それはもう一週間もたってからのこと。手遅れだったのだよ。（CANNAS：1994,78）

ocru malu によって異常な状態に陥ったものに対して、正常な状態に戻す手段が用意されていることが前述の例からわかるだろう。後者の例は迅速に対処しなかったゆえに、回復の可能性が途絶えてしまったのである。これは、ocru malu によって逸脱するものが象徴的に取り除かれたにもかかわらず、元の状態に戻るための手続きをしなかった結果を意味する。つまり、ocru malu の対象は平均を越えるようなものであるが、ocru malu の結果は「病気」のようなマイナス方向への逸脱とされるため、ゼロ＝正常な状態に戻す方法が存在することになる。(図1)

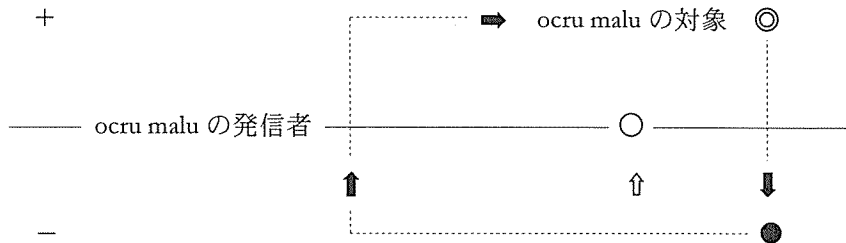
図1 正常から異常へ、異常から正常への循環



ocru malu されたものを回復させる方法は大きくわけて二つある。ひとつは、ocru malu した者が確定できる場合、その人物に直接接触してもらうことである。例えば、赤ん坊が急にぐったりして、その場に居合わせたある人物が原因だとわかれば（誉めたりじっと見つめたりしている者）、即触ってもらう。ただし、相手に失礼になるような場合には露骨に「触って」とは言えないので、それとなく接触するようにしなければいけない。もともと病気を治すとは、ある種の奇蹟、神の手によって施されるものといった信仰の残存は否定できないが、そこには神秘的な力というよりも触れることが「相殺」を意味しているように思う。つまり、toccasana と呼ばれるこの治療は、直接接触するという行為を通じて及ぼされた害が当人のところへ戻ってマイナスからゼロに戻されることを意味する。(図2) ocru malu したとされる人物が触れることによって、与えられた害が中和されると言ってもよいだろう。

図2 toccasana

⇒ 与えられた害



もうひとつの方法は、「適任の女性」(la donna adatta) に診てもらうことで、こちらの方が治療としては一般的である。治療は Zia と呼ばれる老女によって施される場合がほとんどであるが、別にそれを職業としているわけではない。どの村にもたいてい Zia がいて、乞われれば無償で治療を行うのである。CANNAS は ocru malu の治療を施す技術をもっている女性について次のように述べている。

今日でも救済の呪術儀礼は存在し信仰されている。どの村にもさまざまな「適任の女性」、meigadoras とともに incantadoras, meigas と呼ばれる人たちが暮らしている。邪視の餌食となった者が頼みとする女性たちである。都市にもそうした女性がいる。たいてい文盲か少しは読み書きのできる年配の女性で、若い頃に「治療」の秘密を母親か祖母から学んでいる。職は母から娘へと代々受け継がれることが多いからである。そうでなければ、若い頃邪視にやられて治療を受け、呪術治療の技術を学びたいと使命感をもつような女性である。(CANNAS: 1994,42)

CANNAS は「適任の女性」を meigadoras, incantadoras, meigas <sup>(41)</sup> と同一視するが、それはどうであろうか。もし同じであるとすれば、なぜ meigadoras という言葉を用いずに「ocru malu の治療をしてもらう」とだけ言うのだろうか。それは「適任の女性」は治療に熟練しているだけで、meigadoras のように治療の権威者、プロではないからである。la donna adatta, la donna esperta には、自分の村の者で ocru malu を治療できるような「適当な」女性、熟練の女性という意味が込められているのだと思う。そうした女性たちの行動は村内に限られており、meigadoras のようによその村の者に治療することは皆無である。専門家でないから「適任の女性」と言うので、呪術治療を行う女性のように特別な能力や薬草の調合によって差別化されない。もちろん、呪術治療師も ocru malu の治療を行うが、fattura (呪詛) に近い、かなり意図的な力が作用する場合、すなわち職能が求められる場合がおもである。誰もがもつ「妬みの目」にやられた場合は、「適任の女性」に治療を受けるのが原則である。したがって、呪術治療師を異常な状態から回復させる女性とは区別しなければならない。「適任の女性」とはあくまで



素人、村にいる経験豊かな老女＝ Zia のことであろう。治療の報酬を求めないのも、被治療者が貧しいからというよりも、治療は「救済事業」「施し」という観念による。「適任の女性」が治療をするのは当然のこと社会の日常性、秩序を維持するのは女性の役割とされている。

では、このような女性がどのような治療を行っているのか、正常な状態に戻す過程を聞き取ったものを紹介しておきたい。ただし、話をしてくれたのは二十代の若い女性で、評判の Zia には会うことができなかったことを断っておく。

まず、お皿に水を入れるんだけど、その水は聖水でなくてもいいの。それから塩 3 粒を十字を切りながらひとつ粒ずつ入れて、オリーブ油を 3 滴垂らす。これを治療を受ける人の頭にのせて、十字を 3 回切りながら祈禱する。油が大きな粒、円状になっていればそれが ocrú malu された証拠。その場合は祈禱して取り除く。でもその祈禱は絶対に言えないわ、秘密！でないと私の力が失われてしまうから。治療が済めば、水は必ず家の外に捨てる。私は日に 3 人まで治療できるけど、それ以上は絶対無理。ocrú malu が強すぎて手に負えないとわかれば、もっと年配の女性のところに行くように勧めるの。どんな ocrú malu でも 3 人に治療してもらって治らないってことはないから。たいてい良くなるもの。(B 村筆者聞き取り：1997)

彼女の話をもとに治療過程をまとめれば、(ocrú malu かどうか診断 → ocrú malu の可視化 → ocrú malu を取り除く → 治療に用いた水を捨てる (治療完了)) となる。これを治療法に関する他の例と比べてみたが、治療道具や祈禱内容、その回数が異なるだけで、だいたい治療パターンは同じであった。(表 2) もっとも、呪術治療、民間療法自体に焦点を絞った報告では、治療を行う女性はすべて meigadoras となっており、熟練の女性による治療だけを取り出すことはできなかった。ただ、霊や神秘的な力を用いて病気を治したり、故意にもたらしたり。ともかく、治療を行う女性によって塩が小麦の粒になったり、祈禱内容が異なったする場合に、経験を積んだだけの女性 la donna adatta に頼るとは考えられない。ocrú malu の治療に限れば、両者の区別は難しいが、治療過程そのものには違いはなかったりするものの、ocrú malu の診断、可視化、除去には必ず物質的手段と祈禱を通す共通点がある。参考までに次に別な例を上げておく。

その儀式は十字を切りながらコップに水を入れることから始まった。治療の女は小声でぶつぶつ祈禱をして、「神よ、××を病から救いたまえ」と ocrú malu にあった人物の名前を言った。それからあらかじめ選んでおいた大きめの塩 3 粒からひとつ取り出しコップの縁で十字を切ってから入れた。残りの塩粒にも同じことが繰り返された。それから 3 滴のオリーブ油を垂らした。油が水面にくっつきりと円状になって浮かべば、ocrú malu されたことになり、広がって油の粒がなければ ocrú malu ではない。前者の場合に治療が施され、女は 3 つの円が消えるまで同じことを繰り返した。その度にコップの水 (聖水) を炉に捨てるか、火の消えた火鉢の灰にかけた。

円が消えてしまうとそのコップの水を患者は少し飲んで、3粒の塩は再び ocru malu にあわぬようにお守りとしてとっておく。治療の女のなかにはハサミを水のなかに入れて浮かんだ油の円を切って、ocru malu した人物の目と繋がる悪の糸を断ち切ったとする。(COPELLO : 1995)

表 2

治療に必要な物	十字を切る、祈禱の回数
水、塩 (3粒)、オリーブ油 (3滴)	3回、3回
水、小麦 (3粒)	3回、3回
水、小麦 (7粒)	7回、7回
水、塩 (3粒)、オリーブ油 (3滴)、ハサミ	3回、3回
水、ogu de Santa Luxia	3回、3回
水、丸い石	3回、3回

ocru malu の治療にあたる女性とその治療法について事例を上げたが、ここではこれ以上治療形態を考察することはしない。回復のメカニズムとして存在する治療を女性が受けもっている事実を示すに留め、いったん制裁されたもの (ocru malu) に対する救済する手段 (治療) としての意味を重視したい。

なぜ、「元に戻す」必要があるのか。それは「限定された善きモノのイメージ」があるからだと思う。ゼロ・サムゲームの理論を想定すれば、常にゼロの状態が保たれねばならない。それ以上になっても以下になってもだめ、均衡はゼロになることを要求するのである。ocru malu は「並み」以上のものを制裁し、治療は「並み」以下のものを救い上げ、社会全体の安定を保つことになる。ocru malu にあったものは、害を受けている (異常な状態になる) からマイナスで、それはゼロに戻されねばならない。それはある個人やある家族だけの問題ではなく、社会全体の存続安定にかかわるから、みんなで治療する必要がある。ちょうど、家畜窃盗にやられた羊飼の損失分を他の羊飼たちで埋め合せ、元どおりにするようなものである。メンバーの誰かの社会的「下降」は保たれていた全体のバランスを失わせることになるため、元に戻そうとする力が働く。ocru malu の治療は正常な状態に戻すという点で、社会の日常性、秩序を維持する意味をもっている。そして、その役目は女性に与えられているから、村には「適任の女性」が必ずいるのである。

## おわりに

邪視は迷信、俗信、過去の呪術信仰の残存以外の何ものでもない、という考えから出発すれば、神秘的な力や超常現象の渦巻く世界を彷徨うことになるだろう。近代科学の対極にある現象として捉える限り、ある社会ある文化のなかで起きる事象の意味を説明することはできない。本稿でサルデーニャという島を取り上げたのは、呪術そのものから離れてそこで生活

する個人や集団の関係から邪視を考えてみたかったからである。邪視信仰の普遍性よりも地域性の強い ocrú malu にこだわったつもりである。別言すれば、「視線によって災厄をもたらすこと」という邪視の定義のなかに閉じこもらず、社会的文化的文脈にそって解釈することによって見えてくることをまとめたのである。

サルデーニャの村落では、ocrú malu は社会的心理的メカニズムとして機能している。プラス方向への逸脱に対する制裁、平準化のメカニズムとして ocrú malu があり、その一方に、マイナス方向への逸脱に対する救済、回復のメカニズムとして治療がある。その双方の存在が安定・均衡を維持しようとする村落を特徴づけている。

### 『注』

- (1) 本稿では世界中に広くみられる現象に対して「邪視」という言葉を用いる以外は、イタリア語の malocchio, jettatura またはサルデーニャ方言の ocrú malu と原語のままにする。
- (2) 記述中心の報告としては以下のものがある。  
F. VALLA: La jettatura (ocrú malu) in Sardegna (Barbagia), 1894  
M. L. WAGNER: Malocchio e credenze affini in Sardegna, 1913  
V. SECCHI: Leggende e superstizioni in Sardegna, 1921
- (3) 習俗を所与の社会の中で捉えたものとしては以下のものがある。  
C. GALLINI: Dono e malocchio, 1973
- (4) サルデーニャの村落形態は島の四隅を除けば集村で、個々の村はまるで他村への依存を拒否するかのように自己完結的な空間を形成している。どの村も居住空間の周囲に生産空間を配して領域を形成しており、土地の起伏が農業、牧畜、混合の何れかを予想させる。例えば、筆者が聞き取りを行ったB村は標高536mの丘陵地に位置し、北西と南東に帯状に延びる生産空間に挟まれている。それは、tancaと呼ばれる囲い地から成り、居住空間から遠くなればなるほど広くなる。村の領域は高地(1,200m)から低地(300m)にまたがるため、耕作と標高差を利用した移牧が混在、その割合は1対9である。このような農業景観は島の中西部に連なるマルギネーゴチェアノ山脈の斜面に並ぶ村に共通している。
- (5) サルデーニャ方言は大きく3つのグループに分けられる。a) 北部(ガッルーラ、サッサリ地方) b) 中部(ヌーオロ、ログドロー地方) c) 南部(カンピダーノ地方) 今日ほとんどの住民がイタリア語を話す、85%は方言も併用している。
- (6) 1835年ナポリに滞在した時に見聞したことを《La jettatura》として旅行記に収めている。迷信だと嘲笑ってみせる知識人も突然災難にあえば、それはjettaturaのせいだと言うので、外国人もしばらく滞在すればお守りで身を固めるようになると、DUMASは真面目に書いている。
- (7) 人類学では、邪術は物質的手段や具体的行為を通して意図的に神秘的な力を発動させて他者に災厄をもたらすことを言う。呪詛がその例である。
- (8) oghiadoreが登場する話はその人物の神秘的な力によってどんな災厄がもたらされたかを強調する。最初から誰の目にも原因がはっきりしている。
- (9) 「妖しい力」は、しばしば魔物に魅入られるような力 fascino と関係づけられる。fascinoはある特定の人物に生来備わったものとして「目」に表れるとされる。
- (10) FOSTERは認識の方向づけを世界観やエトスに相当するものと言う。どんな社会にもメンバーが共有する認識の方向づけが存在するが、それは通常意識されることもなければ、どんな構造であるか問われることもない。ちょうど文法のルールが構造や言語形態の指針としてほとんどの人に意識されないようなものである。
- (11) meigadoras, meigas とともに呪術治療に携わらない。彼女たちは薬草の調合技術をもっていることによってプロとして差別化される。

incantadoras は霊媒師である。CANNAS はすべて ocru malu の治療者としているが、それは少し乱暴な分類だと思われる。

### 参考文献

- E. R. WOLF  
1955 Types of Latin America Peasantry ; A Preliminary Discussion : American Antropologist vol. 57
- G. FOSTER  
1965 Peasant Society and the Image of Limited Good : American Antropologist vol. 67  
1972 The Anatomy of Envy ; A study in symbolic Behavior : Current Antropology vol. 13
- A. I. HALLOWELL  
1960 Ojibwa ontology, Behavior and World View : Colombia University Press
- W. APPEL  
1976 The Myth of the Jettatura : Colombia University Press
- M. L. WAGNER  
1913 Malocchio e credenze affini in Sardegna : LARES vol. 3  
Dizionario etimologico sardo
- F. VALLA  
1894 La jettatura (ocru malu) in Sardegna (Barbagia) : Archivio per lo studio delle tradizioni popolari vol. 3  
La punga, ossia il talismano del celebre bandito sardo Francesco De Rosas : Archivio per lo studio delle tradizioni popolari vol. 13
- G. B. BRONZINI  
1981 Malocchio, invidia, diagnosi e terapia magica nella cultura contadina lucana degli anni venti : LARES vol. 2
- S. LA SORSA  
1915 Superstizioni, pregiudizi e credenze popolari pugliesi : LARES vol. 4
- G. DELEDDA  
1972 Tradizioni popolari di Nuoro in Sardegna : 3T
- G. BOTTIGLIONI  
1978 (1925) Vita sarda : Editrice Libreria Dessi
- N. VALLETTA  
1988 (1787) Fascino volgarmente detto jettatura : Colonnese Editore (titolo originale ; Cicalata sul fascino volgarmente detto jettatura)
- G. SPANO  
1987 (1851) Vocaborario sardo-italiano e italiano-sardo voll. 1-2 : Arnoldo Forni Editore
- E. DE MARTINO  
1989 (1959) Sud e Magia : Feltrinelli
- T. SEPPILLI  
1989 Medicine e Magie : ELECTA
- M. CANNAS  
1994 Riti magici e amuleti ; Malocchio in Sardegna ; EDES
- N. COSSU  
1996 Medicina popolare in Sardegna : Carlo Delfino Editore
- B. S. COPPELLO  
1995 Tradizioni popolari in Alghero : La Celere Editrice

M. LE LANNOU

1984 (1979) Pastori e contadini di Sardegna : Edizioni Della Torre

B. MELONI

1996 Ricerche locali : Comunità, economia, codici e regolazione sociale : CUEC

G. G. ORTU

1990 Economia e società rurale in Sardegna, in Storia dell' agricoltura italiana in età contemporanea vol. 2 : Marsilio Editore

A. DUMAS

1889 Corricolo : Calman Livy

(Traduzione italiana a cura di Gino DORIA : Ricciardi 1950)

清水芳見

1983 「邪視研究の動向」 『民族学研究』 48/1

阿部年晴

1997 「日常生活の中の呪術－文化人類学における呪術研究の課題－」  
『民族学研究』 62/3

F. T. ELWORTHY / 奥西峻介訳

1992 『邪視』 リプロボート

小松和彦

1994 『憑霊信仰論』 講談社学術文庫

岩本由輝 / 國方敬司編

1997 『家と共同体－日欧比較の視点から－』 法政大学出版局

E. B. TYLOR / 比屋根安定訳

1962 『原始文化』 誠信書房

T. GAUITER / 小泉保義訳

1991 『魔眼』 社会思想社

(1999.5.12 受理)